

第3章 方法

第1節 研究方法の選択に関する検討

本研究を進めるにあたっての研究方法として質的研究法を用い、特に得られた質的データの分析方法として、「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ：Modified Grounded Theory Approach（以下、タイトルを除き M-GTA とする）」（木下，2003：2007）に準拠することとした。以下、（1）質的研究法を採用する理由、（2）質的研究法の中でもグラウンデッド・セオリー・アプローチに準拠する理由、（3）グラウンデッド・セオリー・アプローチの中でも、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチに準拠する理由を述べる。

1 質的研究法を採用する理由

（1）質的研究法の必要性

研究デザインには量的研究法と質的研究法の2つがあることが言われている（松為，2001）。そして近年、特に看護・保健、医療、作業療法、教育など対人援助に関わる実践領域での質的研究への関心が高まりをみせてきていると指摘されている（木下，2003）。

質的研究法とは何か。文字通り取れば「質的データを扱う研究法」ということになるだろう。この場合質的データとは、文字テキストや文章が中心となっているデータのことである。なお、心理学におけるデータの分類法の一つ、名義尺度（単なるカテゴリー分け。同一あるいは同種のものの頻度を数えることができる。データの並びには意味が無い。出身県、音楽のジャンル、花の種類など。¹⁾）も「質的データ」と呼ばれる場合があるが、本報告書では、一連の記述や語り、メモ、映像などのことを指すものとする。

また、さらに質的研究法の立場に拠って行なわれた研究に接したことのある人であれば、質的研究法とは、「質的データを集め、その結果の報告に際しては、数値による記述や統計的な分析というよりは、日常用語に近い言葉による記述や分析を中心にする研究法」と定義するかもしれない。

さて、この定義は（1）質的データを収集し、（2）言葉で記述や分析をする、という2つの部分に分かれている²⁾。なぜ「質的データを収集し」、「言葉で記述や分析」をしなければならないのだろうか。以下、この2点について論ずる。

¹⁾ 長谷川（2003）による解説。

²⁾ 研究結果として表に現れるのは、後者の方であるが、実際、質的研究法の結果として、数字や数式の羅列ではなく文章による記述が、示されるのが常であり、中にはルポルタージュや読み物のように読めてしまうこともある。そのため、質的研究に接したことのある人の中には、質的研究がグラフや表、数式などが出てくる、広く流布している量的研究と大いにスタイルが異なるため、「これが研究と言えるのか」と疑問を持つ人もいるかもしれない。しかしながら、国際的にはこのような質的研究法も、重要な研究手法の一つと捉えられている。（筆者注）

ア. 質的データを収集する必要性

質的データの収集の必要性は、数量的データの収集にのみにこだわった場合に発生する問題点から、逆説的に指摘できよう。まず、何よりも数量的データの場合、測定前に測定すべき項目を決めておかななくてはならない。そのようにした場合、測定すると決めた項目以外の情報は扱われないことになってしまう。例えば事業所における雇用管理について、事業所にアンケート調査を行う場合、質問すべき項目を前もって決めておかなければならず、その設問項目以外のことについては、取り上げられなくなってしまう。そのため、何が取り上げるべき変数か、あまり明らかになっていない領域では質的データの収集は有効な手段であろう。

また、複雑な相互作用のプロセスを含んでいる現象を研究しようとする場合、数量的データを得ようと測定すると、測定すべき項目は非常に多くなる。また時間を追って測定を継続する必要性も発生する。そのため、データ収集に非常に労力を要する。このデメリットを考えると、質的データを収集することにメリットが存在することがある場合があることが分かる。以上のことから、質的データを収集する方がふさわしい研究が存在することが示唆される。

イ. 言葉で記述や分析をする必要性

言葉で記述や分析をする必要性についても、先述の、質的データを収集する必要性と同様の理由がある。確かに、質的データを収集し、その結果を数値で表すというアプローチも存在する。そのアプローチでは、例えばある単語が何回使われているのか、どのような単語が伴っていることが多いのかなどを分析し、その結果は2次元の数直線上どこに位置するのかなどの図で表現することも行われる（例えばある商品に関するイメージの調査などはこのようなアプローチで行われることも多い）。しかしながら、数値では表現しにくいものもある。例えばある現象のプロセスや、行為の意味などは数値に還元しにくい。そのため、言葉で記述や分析をする必要性が出てくるのである。

(2) 質的研究法の特徴

三毛（2003）は、質的研究法の特徴を以下の6項目にまとめている。

- ①調査者の技能や力量によって、データ収集やデータ分析の質が左右されるので、調査者が道具である。
- ②調査者が人為的な操作を加えない自然な場で、自然に生じている現象について調査が行われる。
- ③データは、インタビューやフィールドノーツ、記録、メモ、写真などを通じて、数字でなく言葉や絵によって収集される。
- ④人々の感情、意図、認識、相互作用に付与している意味に焦点をあてる。
- ⑤現象や出来事や行為のプロセスを明らかにする。
- ⑥研究テーマについて豊富で詳細な描写をする。

そして、特に④～⑥は質的研究の長所とされる。一方、①③は先述したとおり質的研究法に固有の特徴であるが、調査者の力量・技能（そして関心にも）に左右されることが大きい、ということと関連す

る。また、②は質的研究法の特徴ではある。ちなみに、「実験的（人為的な操作を加える）」で、自然な「場」で行われる研究手法もあるし（社会実験、応用行動分析学の実験など）、「離れた場」から「自然に生じている現象」について把握する研究手法もある（郵送式のアンケート調査など）。しかし、「自然な場」で「自然に発生している現象」について行う研究法の主要なものは「質的研究法」であろう（なお、自然な場（＝現場）で、アンケートを行うといった研究手法もある。後述する質的研究法の一つであるエスノグラフィでは、観察に加えこのようなアンケートを行う場合もある）。

（3）質的研究法の「質」の確保

質的研究法では調査者自身の技量等によって結果が左右される面があり、質的研究法の「質」の確保のためには「信頼性」と「妥当性」が求められる。この「信頼性」と「妥当性」は、研究者の拠って立つ「認識論」によって異なることが考えられるが³⁾、伝統的に行われてきた量的研究では次のようにと捉えられてきた。

「信頼性」とは、測定を何度行っても同じような結果になるということである。例えば知能を知能検査で測定する場合、受検者の体調や受検歴による結果の変動があるにしても、ある人の測定された知能指数はおおよそ一定の幅に収まるようになっている。これは知能検査に「信頼性」が確保されているからである。例えて言えば、ある物の長さを測る際、ゴム製の物差しでの測定は「信頼性」は低く、気温や圧力に左右されにくい金属製の物差しでの測定は「信頼性」が高いということになる。

また「妥当性」とは、測ろうとするものが本当に測定できているか、捉えようとしていることが本当に把握できているのか、ということである。例えば、「発達」を測定しようとしていたとする。発達には、身体面での発達も認知面での発達もあるだろうし、また一生涯「発達する」（特に精神的な意味で）という捉え方もある。しかしながら、身体面での発達のみしか測定していないとすると、それは「発達」の一側面しか捉えていないということになる。これは「妥当性」が確保されているとは言えない状況である。物差しの例えて言えば、目盛りのおかしな物差しで測定を行っているということになるだろう。

「信頼性」「妥当性」とは簡単に言えば以上のような内容であるが、特にアンケート調査などについては、これらを確保するために、再テスト法（時期をずらし同じ内容の項目を同一回答者に再度回答して

³⁾ 認識論の中心的なテーマは「主観」と「客観」は果たして一致するのかという問題であり、西洋哲学の大きなテーマとされてきた。すなわち、目の前にある事物や認識した現象は、主観にとってあたかもそこに（自分の主観と離れて）存在するよう見える。しかし、そのように捉えている客体（存在すると主観で感じている事物や現象）とは、本当に主観を離れて存在するのだろうか。また、そもそも主体は正しく客体を捉えられるのだろうか、という問題である。物質的な物の存在（目の前に「鉛筆」や「リンゴ」があるとして、本当にそれらが存在するのかわからないのか）であれば、それほど疑問を抱かないかもしれない。鉛筆もリンゴも確かにそこにある（と感じられる）からである。しかし、これが例えばある人の意志・感情といった内面や、「知能」「障害の受容」「社会適応」といった「概念」となると異なってくる。目の前に見えるのは、ある人の笑顔であったり、ある障害者の言動である。そして、ある人が笑顔だから本当に「楽しい」という感情をその人が持っているのか、または「障害の受容」は起きているのか、判断者によって判断がまちまちになる可能性があることが考えられる。

主観と客観の関係について以上のように考えることができるが、それでも、主観と離れても客体は存在することを前提とし、かつ直接扱うことができないある人の思考や感情を、判断者の主観・思い込みに左右されずに、正しく、把握しようと、様々な工夫が行われてきた。それが心理学や社会科学等において行われてきた「信頼性」及び「妥当性」確保のための工夫である。

もらう)等、いくつかのテクニックが開発されてきている。そして、このようなテクニックで、「信頼性」「妥当性」が確保されていることが確認されれば、言い換えれば「何度測定しても結果同様」であり、「測定したいものが測定できているという保証」があれば、判断者の主観を排除でき、客観的に正しく物事や現象を把握できる。そのような考えに立ち、対人サービス分野でも「科学的」な研究やツールの開発が進められてきたと言えるだろう。

しかしながら、このような研究の前提である「客体は主体を離れて存在する」「主観をなるべく排除すれば『正しい』認識に到達できる」という認識論に疑問が持たれるようになってきている。例えば社会構成主義では「記述や説明、そしてあらゆる表現形式は、人々の関係から意味を与えられる」「(主観を排除して到達できるという)客観性とはレトリックである」「価値中立的な言明など存在しない」等のことが主張されている (Gergen, 1999)。

このような社会構成主義に基づく認識論は、主観を離れても客観的に事物は存在するのだという認識と対極的なものであるかもしれない。しかし、大量の数値データを処理するという従来型の研究法に疑問(現場から離れた所でデータを分析して、現場で起きていることが本当に十分把握できるのだろうか、等の疑問)を持ち、質的研究法を採用するという研究者も少なくない。そしてこのような場合、さらに認識論まで遡って議論されることもあり、質的研究法における「信頼性」「妥当性」は、量的研究法のそれらとは異なるべきであると考えられる研究者もいる (例えばサトウ, 2004)。

以下は、呉 (2003) の言う、質的研究法における「信頼性」「妥当性」を高めるための方策である。なお、信頼性確保のための方策の5番目の項目は、もともと「推論の少ない記述」という表記であったが、その内容から「事実に基づいた記述」に改変してある。

●信頼性を高めるための方策

- ・研究者の身分・地位の明確化：どのような研究者が、どのような立場から、どのように研究対象に関わったのか等を報告書に明記することで、他の研究者がその結果を追って理解したり、反証することが可能になる。
- ・構成概念の明確化：研究の前提や理論的基盤、専門用語の選択などを明確にし、読む者の認識の前提を報告者(研究実施者)と揃えることで、信頼性を確保しようというものである。
- ・データの収集と分析テクニック：データ収集とデータ分析の手法を明確化し、報告書に記載することで、他者の判断を受けやすくするものである。
- ・事実に基づいた記述：基礎的観察データや基礎的情報(インタビューのローデータなど)(事実)を提示し、それと区別して解釈をすることである。
- ・複数の研究者：複数の研究者でチームを組み研究を行ない、合意が得られるまでメンバー間で議論を行い、結論に到達することである。
- ・機器を使って記録されたデータ：オーディオレコーダー、カメラなどを使用し、それによりデータを記録し保存でき、そのため結論の信憑性を他の研究者が確かめることが可能となる。

●妥当性を高めるための方策

- ・トライアングレーション：原意は「三角測量」である。三角測量とは複数の測定地点を設定し位置関係を求める測量方法であるが、これになぞらえた表現であり、異なったグループや異なった時期などからデータを収集したり、複数の研究者（＝データ分析者）が研究に関わることである。これらの方法により、データの信憑性を高める。
- ・反証事例：パターンを設け、そのパターンに当てはまらない場合・ケースを検討し、そのパターンを深く理解しようとするものである。
- ・研究デザインのチェック：なぜ質的研究法を用いたのか、なぜそのデータ提供者を選んだのか、データと解釈を明確に区別しているかなどをきちんと吟味し、また研究結果に記載することである。

なお、このような「信頼性」「妥当性」を確保する工夫が設定されているということは、単純に「ヒアリング」を行い、その概要をまとめていく、といった、いわゆる聴き取り調査と大きく異なる点である。通常の「ヒアリング」では、どのような身分の研究者がどのように研究対象に関わったのかとか、データ分析の手法を明確に示すとか、反証事例を見つけるようにする、といった工夫は行われていないか、あるいはそのことが研究報告書に明確に書かれていることは少ない。上記のような「信頼性」「妥当性」の確保を常に念頭に置いて、質的研究を行なっていくことにより、単に「ヒアリングを行い、このような実態がわかった」「現場ではこのように活動が行われていた」とエピソードを記すだけではない、「質」の高い質的研究が行なうことができると考えられる。

(4) 本研究が質的研究法を採用する理由

質的研究法には、事例研究、エスノグラフィ、グラウンデッド・セオリー・アプローチ、KJ 法などがある。これらは明確に分かれるとは限らないが、概略を表3-1に掲げる（筆者による概説）。

表3-1 各種の質的研究法の概略

事例研究	事例（人であっても、場面であっても、機関・集団であっても「事例」である）を記述し、個別的・経験的な知見から、より一般的な事実や法則の体系化を行うおうとするアプローチ。
エスノグラフィ	それぞれの民族の文化の行動様式を解析する人類学から分化したものであり、あるフィールドで生活する人たちの生活や文化を調べることを目標として、質的データを、ある観察者の視点から一貫して記述するもの。手法名であるが、研究成果物も「エスノグラフィ（民族誌）」と呼ばれる。
グラウンデッド・セオリー・アプローチ	現場に基づいた質的データから説明力のある理論を創りだすことを目的とした手法。詳細は本章にて後述。
KJ 法	文化人類学者の川喜田二郎氏の開発した手法。まず現場の生の情報を多くのカードに書き出していき、類似しているカードを4～5枚程度まとめたグループを作り、そのグループ名を付す。そして、そのグループをさらに4～5つまとめグループ名を考える。そしてそれらの関係を考え図解するなどの作業を行う。研究者が、思い込みで現実を理解・認識してしまうことを避けるための手法である。

さて、Hagner & Helm (1994) は、質的研究法が特に貢献できる領域として、三毛 (2003) とも重複するが、

- ①自然な環境下での行動の研究
- ②当事者にとってのその現象の意味や見方の研究
- ③新たな領域もしくはあまり探索されていない現象の研究
- ④複雑な社会的プロセスに関する研究

の4点を挙げている。

一方、本報告書で扱う、NS 形成の過程という研究領域を検討すると、

- ①事業所場面という、実験室ではない統制が困難な自然環境下での現象である。
- ②ジョブコーチなどの支援者や事業所担当者といった当事者の観点から、その現象の意味や見方の研究を行なう必要があること。
- ③前章まで見てきたとおり、NS 形成の実践はジョブコーチ支援で実践されているものの NS 形成過程に関する知見が十分でない現状にある。
- ④NS 形成は、支援者・事業所・支援を受ける障害者や家族などの関係者から構成される複雑な社会的 (相互作用) プロセスが関係していることが想定される。

と、Hagner & Helm (1994) の指摘の4点全てに、本研究で扱う領域が対応している。

加えて、本研究で明らかにするリサーチクエスチョンは、第1章で示したとおり

- ①NS 形成はスムーズには進まなかったが、しかしながら何とか NS 形成を達成することができたケースにおいて、支援者はどのような活動や経験をするのか?
- ②支援者が色々と工夫を凝らした活動を行ったものの、結局 NS 形成がうまく進まなかったケースにおいて、支援者はどのような活動や経験をするのか?
- ③障害者雇用に積極的であるとされる企業において、直接障害者と日常的に接している事業所の職員は、受け入れ時にどのような経験をしているのか?

と、「どのような (How?)」経験かを問うものであり、このリサーチクエスチョンは質的研究法に適した設問形式である (Creswell,2003)。そのために本研究では質的研究法を採用する。

2 質的研究法の中でもグラウンデッド・セオリー・アプローチに準拠する理由

(1) グラウンデッド・セオリー・アプローチとは

グラウンデッド・セオリー・アプローチは、もともと 1960 年代に米国の社会学者ストラウス (Strauss) とグレイザー (Glaser) によって考案された質的研究法である。そして、同研究法は現場に基づいた質的データから説明力のある理論を創り出すことを目的としている。なお、グラウンデッド・セオリー・アプローチにより生成された理論は「グラウンデッド・セオリー」、グラウンデッド・セオリーを生成する研究方法は「グラウンデッド・セオリー・アプローチ」と呼ばれる。この手法は、1960 年代当時の社

社会学のあり方（量的研究による「理論検証」に偏っており、一方で現場のデータに基づいた実証的な「理論生成」がなされていない）に対する、新たな研究方法として提案された。

研究により生成された理論（仮説）が「グラウンデッド・セオリー」であるためには幾つかの要件がある。それは、その生成された理論が5つの理論特性を持つこと、また、その生成された理論の指し示す内容は4つの特性を持つこと、である（木下，2003）（表3-2、表3-3）。

ア. 理論特性5項目

理論特性について概要を述べる。グラウンデッド・セオリー・アプローチは、理論生成を目的とする研究方法であり、研究の結果生成された「理論」とは、説明しようとする現象に関し説明力を持つものでなければならないということである。ただし理論生成と言っても研究者の頭の中（及びその研究者の個人的な体験）で理論を生成するのではなく、インタビューや観察等でデータを収集し、そのデータを基に（grounded）、実証的に理論を生成していくのである（表3-2の第1項目）。また、その生成された理論は、特に人間関係など変化していく社会的相互作用についての説明と予測に有効でなければならない（表3-2の第3及び第4項目）。そして、このような特性を持つ理論であるからこそ、ヒューマンサービスなどの実践分野で活用され、また検証され修正されていくべき理論である必要があるということである（表3-2第5項目）。

では、その理論生成はどのように行うか（表3-2の第2項目）。ごく簡単に言えば、データ収集と理論生成を並行して行なうのである。すなわち、いったん収集したデータを分析・解釈し概念化し、また概念間の比較、概念から成るカテゴリーと概念の比較、等を行う。そして、この比較の中で、理論が出来上がっていくが、それとともに、その生成中の理論がデータに対して説明力を有しているか（例えばその理論案で説明できる例は他にないか、説明できない例外的・対極的なデータがないかどうか）を検討していく。もし、アイデア段階である理論の説明力をもっと増加させるために、データ収集をもっと行う必要があるという判断になれば、さらにデータ収集を行う。そして、この追加データを加えて分析を・解釈を行ない、理論生成していくのである。この繰り返しにより、生成されつつある理論の説明力は増加していく。

表3-2 研究の結果生成されるグラウンデッド・セオリーが備えているべき理論特性（木下, 2003）
＜筆者による要約＞

1. データに密着した分析から独自の概念が創られ、その概念から成り立つ理論であり、説明しようとする現象に関しての説明力を持っていること。
2. 理論はデータ分析によって実証的に生成されるが、そのデータ分析は、継続的比較により行なわれたものであり、その結果「理論的飽和」が達成されていること。
3. 社会的相互作用において、説明と予測に有効な理論であること。
4. 社会的相互作用の変化を説明できる動態的理論であること。
5. 実践的な活用を促す理論であること。

表3-3 研究の結果創出されるグラウンデッド・セオリーが備えているべき内容面の特性(木下, 2003)

〈筆者による要約〉

1. 現実と適合していること。
2. 理解しやすいものであること。
3. 一般性があること
4. 応用者は創出されたグラウンデッド・セオリーを基に、現実場面においてコントロールが可能であること

そして、この繰り返しにより、その生成されつつある理論で現象を十分説明でき、さらにデータ収集を行っても例外的な事例やパターン等が見られないと判断されれば、データ収集は終了し、理論が確定される（これを「理論的飽和」と呼ぶ）。また、概念やカテゴリーは、このプロセスの中でも継続的に比較・分析される。それは、次のデータ収集の方向性を定めるためであり、またさらには精緻な理論を生成するためである。この継続的な概念やカテゴリーなどの比較や分析のことは「継続的比較分析」と呼ばれる。

イ. 内容特性4項目

グラウンデッド・セオリーはその名のとおり、現実に基づき・密着した理論でなければならないが（理論特性第1項目）、その結果は当然現実と適合していなければならない、というのが内容特性の第1項目である。またそれは、データ分析の対象となったデータのみを説明できるものではなく、ある程度の一般性がなければならない（第3項目）。そして、現実と適合し一般性があるだけでは不十分であり、研究の読者や応用者に理解しやすいものであり（第2項目）、その結果、応用者は生成されたグラウンデッド・セオリーを基に、現実場面においてコントロールが可能である（第4項目）必要があることを意味する。

なお、これらは研究結果が、グラウンデッド・セオリーたりうるかどうかを判断する評価項目になる。そして、特に理論特性の5番目の「実践的な活用を促す理論であること」及び内容面の4特性は、研究結果が公表され、評価されればそれで終わりというのではなく、今後実践の場で活用され修正されることを意味するものであり、特に強調されるべきであろう。

(2) 本研究がグラウンデッド・セオリー・アプローチに準拠する理由

先述したように、質的研究法には様々な方法があるが、本研究ではグラウンデッド・セオリー・アプローチに準拠することとする。それは、他の質的研究法と比べた場合、実践現場に応用されやすい理論（理解の枠組み）を提供することを目的としており、本研究の目的と合致すると考えられるからである。

事例研究やエスノグラフィは、ある個人や場面に関して記述された内容の詳細さや物語性、リアリティから読者に有用な示唆を与えることを目指す、言わば「ある個人や場面に関する記述」が研究の前面に出てくるものである。一方、グラウンデッド・セオリー・アプローチは基本的には、実践現場でのデ

ータに基づき (grounded)、当該現象を説明できる概念やカテゴリーを生成し、データ・概念・カテゴリー間での「継続的比較分析」を行い、説明概念やカテゴリーから構成される理論の生成を目的としている。つまり、グラウンデッド・セオリー・アプローチは、研究対象とする現象を抽象化し概念を創り、概念間が相互に関係する「構造」「骨組み」を抽出する。そのため、研究対象とする「ある個人や場面に関する記述」は研究結果として前面に出てくるのではなく、研究のための「素材」となる。グラウンデッド・セオリー・アプローチという研究法にはこのような特徴があるため、エスノグラフィや事例研究に比べ、各事例に関する物語性は希薄になるという短所はある。しかしながら、まとまりのある仮説として提示されるので、実践場面において活用されやすい(木下, 2003)面がある。本研究は、NS形成の過程を明らかにすることを目的とし、その結果は、支援者や事業主などが職業リハビリテーション実践現場で活用されることが期待される。そのため本研究ではグラウンデッド・セオリー・アプローチに準拠したデータ分析を行なうこととする。

3 グラウンデッド・セオリー・アプローチの中でも、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチに準拠する理由

(1) M-GTA の特徴

1960年代に考案された当初の、質的データの分析手法としてのグラウンデッド・セオリー・アプローチ(オリジナル版)は具体的な分析手順が十分明確化されていなかった。またその後、考案者の2名の学者(StraussとGlaser)は意見を異にした。上記諸特性を備えた理論を生成するという研究法の根本的な方向性は同じであるものの、1978年のグレイザー版、1990年のストラウス&コービン版とそれぞれグラウンデッド・セオリー・アプローチの分析技法の解説本が出版され、それぞれの説く手法は異なっているのである(木下, 1999; 木下, 2003)。これらの後発のグレイザー版やストラウス&コービン版にはそれぞれの分析技法が示されているものの、木下(2003)によれば、グレイザー版は非常に複雑であり、またストラウス&コービン版は初学者のために分析手順がやさしく書かれているものの、分析手順が模式的に扱われすぎており、また認識論的な立場や一貫性にぶれが見られる。そこで、木下により、もともとの同研究法の意義を考慮したうえで分析手法を明確化されたものがM-GTAである。M-GTAは「現在の認識論から分析法、論文執筆に至るまで体系的かつ実践的にまとめられている優れた枠組み」(西條, 2005)とされる。

また、このM-GTAは、オリジナル版以上により「シンボリック相互作用論」(Bloomer,1969)、す

なわちデータ提供者にとっての意味⁴⁾を重視し、その視点から研究者がデータ解釈することに力点が置かれているとされる(三毛, 2003)。また、データ解釈をしていく前提として、研究者の問題意識等を明確に意識化することも重要とされている。質的データを解釈し概念を生成し研究対象とする現象を説明できる理論を生成することを目的としている点は、他のグラウンデッド・セオリー・アプローチと同じである。

M-GTAの特徴は木下(2003)によると次の7つの点である。

- ①研究の結果であるグラウンデッド・セオリーは、理論特性5項目、内容特性4項目を満たすものであること。
- ②データの切片化はしない。
- ③データの範囲確定、分析テーマの設定、理論的飽和化について判断するため、方法論的限定を行う。
- ④データに密着した独自のコーディング方法を採用している。
- ⑤「研究する人間」の視点を重視する。
- ⑥面接型調査に有効性を発揮する。
- ⑦解釈の多重的同時並行性。

以下②～⑦のそれぞれについて、補足する。①については、他のグラウンデッド・セオリー・アプローチと同様であり、前節で触れたことから省略する。なお、②④⑦はデータの処理方法に関すること、③⑤は分析する視点に関すること、⑥はM-GTAの特長に関することである。以下、この3つについて述べる。

ア. データの処理方法に関すること

②は、他のグラウンデッド・セオリー・アプローチとM-GTAの大きな違いである。他のグラウンデッド・セオリー・アプローチでは、図3-1で見られるように、まず分析初期段階一行ごとなどに区切り(これは「切片化」と呼ばれる)、切片化された各データについてのコーディングを行う。この工程はオープンコーディングと呼ばれる。そして、その後は、図3-2で見られるように、一次コード、二次コードとまとめていき概念を生成する⁵⁾。オープンコーディングにおいて切片化は分析者

⁴⁾ 「意味」とはやや分かりにくいものかもしれない。関口(2001)は、質的研究における当事者にとっての「意味」について、『意味』はあるひとまとまりの人々の間で共有されている知識をさすといつてよいでしょう: 事物、行い、出来事、その他あらゆるものについて人々の認識の仕方、感じ方、判断の仕方を枠づけ・方向づけしている知識であり、従って、その人々の生活する「現実世界」を形づくるものです。」とし、携帯電話を例に次のように説明している。

「携帯電話というモノに対して今日さまざまな意味が人々によって与えられています。ビジネスの最先端で生き残りをかけて生活している人々にとっては携帯電話には、ノートパソコン、電子手帳、インターネットなどと連携して使う「モバイルグッズ」と呼ばれる仕事の「武器」の一役を担うものとしての意味が作られているでしょう。生徒たちの問題行動に毎日悩まされている中学校の管理職にとっては、「うちの生徒がまた事件を起こした」ということを知らせる「恐怖のメッセンジャー」としての意味が作られているでしょう。生活を楽しむことを優先する若者の世界では、ポケベルにとって代わって現れたもので、仲間意識の確認、コミュニケーションの道具、アクセサリとして等の意味が強く形成されているでしょう。また、電車の中やレストランなどの公共の場では、騒々しい迷惑な存在としての意味も与えられています。」(関口, 2001)

⁵⁾ KJ法と共通する手続きであると言えよう。

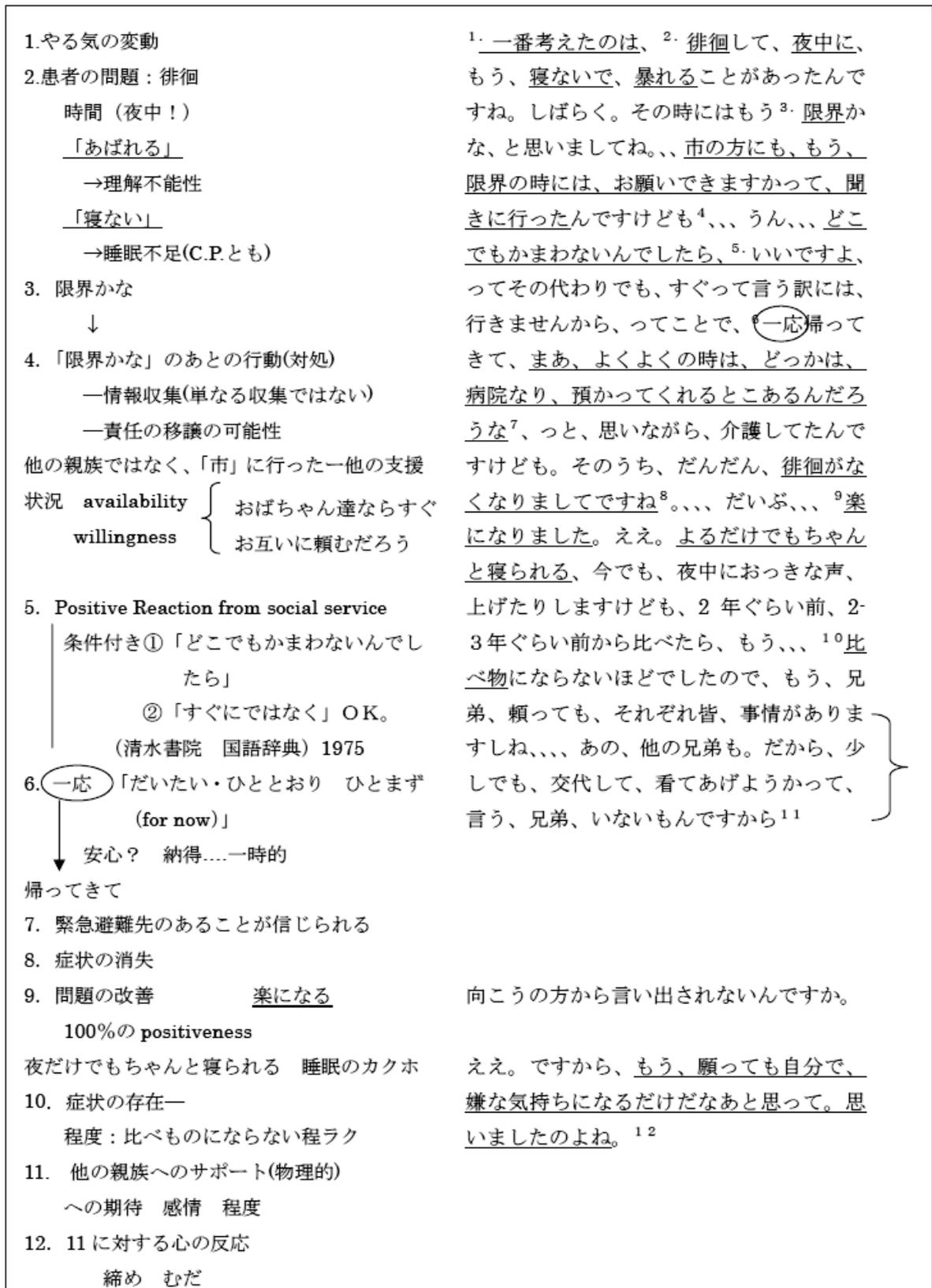


図3-1 切片化によるデータ分析の例（山本・萱間・太田・大川，2002）

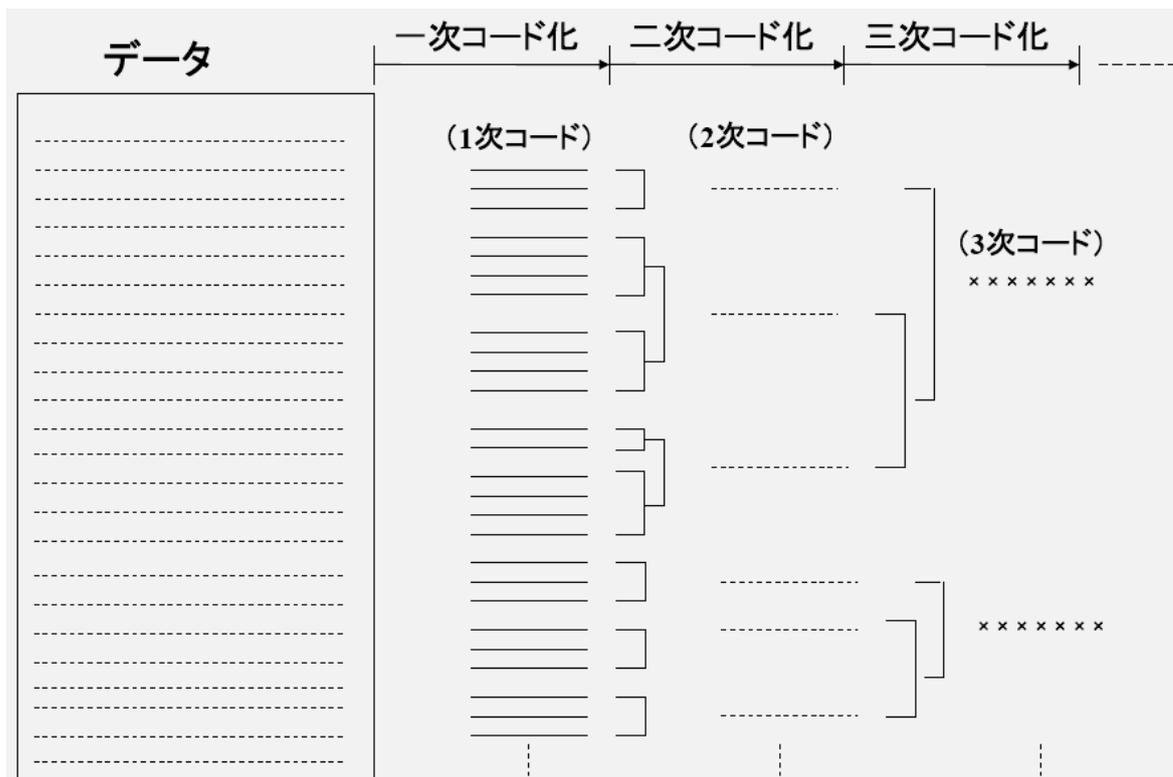


図3-2 質的データの一般的コーディング・イメージ (木下, 2003)

の主観的な思い込みを排するために必要な作業とされる。言い換えれば「切片化という仕掛けによって文脈から自由になることで、自分の主観にも、前後の文脈にも左右されず、データ本来の意味を客観的に理解することができる」(戈木, 2005) ののである。しかしながらこのように切片化することにより、オリジナルの文脈が軽視されてしまう(佐藤, 2006) 場合もある。また、生成した概念から元のデータを辿って確認しにくいものも含まれる。つまり、元データから1次コード化(概念化)、そして1次コード化を元に2次コード化と分析が進むため、高次のコードになればなるほど元のデータが辿りにくくなる。データを切片化して何段階もコード化を進めることは、このような弊害があり、切片化するのではなく、独自のコーディング法を採用している。

では、どのようにコーディングするのか。詳細は次節に説明するが、「分析ワークシート」を活用する。そしてこの分析ワークシートにより、データ内容を要約したものと言うより、そのデータの指し示す分析焦点者(インタビューを受けた人)から見た「意味」を解釈し、概念化する。そしてこの概念を比較し、カテゴリーやサブカテゴリーを作っていく。また、このようにM-GTAでは質的データを解釈・分析していくが、この解釈・分析は、段階的に行なうものではない。例えば、第1段階目としてローデータから分析ワークシートを用いての「概念」創り、第2段階目として「概念」をまとめる「カテゴリー」創りと、進めるのではない。そうではなく、概念を創る時に並行してその概念と関係するであろう概念やカテゴリーを推測するなど、同時並行的に複数の概念・カテゴリー創りを行う。このようにすることによって、継続的比較分析(後述する)が可能となるように設計されてい

る。

なお、このように切片化するのではなく、データのあるままとまりについて分析ワークシートを用いて分析することにより、研究対象である現象のプロセス性が把握しやすくなるというメリットがある。

イ. 分析する視点に関すること

基本的に、質的データに向かい合って理論生成を目指す際、思い込みを避けるためには、なるべく「虚心坦懐」にデータに向かい合い、また研究者はその主観を排除するよう努めることが求められていると言えよう。しかし、研究者がデータと向かい合う場合、本当に全くの先入観なしに「虚心坦懐に」「白紙の状態」であることができるのであろうか。M-GTA では、むしろ研究者の関心を積極的に「意識化」する、すなわち研究者は自分が何に関心を持っているのか、徹底的に自問自答することが求められる。そして、自分の関心を明確に意識しながら、データに向かい合うのである。すると、データのどの部分を見るのか（またなぜそのデータ部分を見るのかの理由も）決まってくる。これが「研究する人間の視点」「データの範囲確定」である。またこの「関心」が明確であれば、その関心に比べ向き合っているデータが十分に内容を含んでいるのか検討することもできる（これも「データの範囲確定」である）。自分の関心を明確化しデータを見ていき、もっと自分の関心を分けて捉えた方がよいという場合もあり、それが「分析する視点」となってくる。また、分析テーマが明確で狭い範囲であれば、「理論的飽和」（後述する）しているかどうかの判断もしやすくなり、逆に分析する視点が不明確で広ければ「理論的飽和」しているかどうかの判断がつきにくくなる、といった関係にある。

例を挙げれば「知的障害者の職場適応はどのように進むのか」という分析テーマは、「大きな」分析視点であり、理論的飽和化の判断がしにくいのが、例えば「小売業のバックヤード作業に従事する若年知的障害者の、職場の人間関係への適応はどのように進むのか」という分析テーマにすると、前者よりも理論的飽和化の達成やその判断が行いやすくなる、ということである。

ウ. 面接型調査への有効性発揮

面接型調査の場合、例えばなる事件のエピソードを把握しようとする際、細かな行動一つ一つが漏れなく被調査者によって語られるとは限らない（むしろ省略されたり、抜け落ちることが多くなる）。このような細かな行動は、面接型調査よりもむしろ現場での観察と記録を行ったほうが、細かな把握はできる。しかし、そのとき行為者がどのような意図で行っていたのかについては、面接型調査の方が多く語られるし、調査者も当然尋ねることができるので把握可能である。逆に観察では行為者の意図については（当然そのときにその意図を尋ねることは、一連の行為の流れの妨げになり）、困難な場合も多い。

さて、先述したとおり M-GTA ではデータ提供者である行為者にとっての「意味」を把握することに力点が置かれる。そのため、面接型調査に有効性を発揮するのである。また、現場での観察には、時間と労力がかかりかかる。例えば、十分に多くのデータを集め、質的研究として取りまとめていくには、数ヶ月から数年かかるとされている。面接型調査を行い、M-GTA によりコンパクトな理論生成をしていくことは、制度の動きが激しく、かつ早く成果を求められるヒューマンサービス分野に

において、現実対応面からも有効であろう⁶⁾。

M-GTA は、このようにグラウンデッド・セオリー・アプローチの一種であるが、データ処理法、分析テーマの設定などで異なる面もかなりあるのである。

(2) 本研究が修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチに準拠する理由

本研究では、M-GTA に準拠し、データ分析を行なうこととする。その理由は以下のとおりである。まず、本研究では行為者の意味の解釈を重視するからである。本研究では NS 形成過程についての理論生成を目的とするため、支援者の NS 形成行動を分析対象としている。さて、NS 形成行動とは第 1 章で論じたとおり、本報告書では「支援先事業所内に NS を形成しようとする意図を持つ、支援者が行う諸活動」とし、NS 形成の意図の有無を NS 形成行動か否かの判断の拠り所としている。つまり、支援者にある行動をした際に、背景として NS 形成の意図があったかどうかに着目している。先述したとおり、M-GTA は特に行為者にとっての「意味」を把握することに力点が置かれる。そのため、支援者の活動の背景にある内的な意志を捉えようとする本研究には適切であろう。

第二に、M-GTA では、データを切片化せず分析ワークシートを用いて分析するため、文脈やプロセス性を重視した分析が可能という長所がある。一方、NS 形成の過程とは、対象者・事業所・支援者間の相互作用から成るものであることが考えられる。そのため、M-GTA は NS 形成の過程を明らかにしようとする本研究の目的に合致する。

また、M-GTA は面接型調査に有効性を発揮することを先述した。一方、本研究では NS 形成がなかなか進まないといった支援状況が困難な状況に関する理論の生成を目指している。このような支援状況が困難な場合について、現場を訪問しデータを収集するのは、さらに現場を研究者が入ることによってかき乱すことにもなりかねない。そのため訪問調査や、ましてや現場での長期的観察は、倫理的な観点から避けざるを得ない。つまり、面接型調査というデータ収集法を取らざるを得ない。この制約は反面、M-GTA の「面接型調査への有効性発揮」という長所に合致する。

以上の理由により、本研究に M-GTA を適用することは適切であるということが言えよう。

⁶⁾ なお、M-GTA ではなく、特にもとものグラウンデッド・セオリー・アプローチが開発された際の研究である「死の Awareness 理論と看護」(Glaser & Strauss, 1965) では、米国西海岸での病院を舞台に観察によってデータが収集された。そして、がん患者がその病気を告知されず医療者も患者ががんであることを隠している状況(閉鎖認識)、患者が自分がんであることを疑いだすものの医療者が隠している状況(疑念認識)、その他「相互虚偽」「オープン」などの概念化がなされた。

第2節 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの分析手順

1 分析の重要な要素

M-GTA でデータ分析にあたって重要とされるのは、「継続的比較分析」「理論的サンプリング」「理論的飽和化」である。以下これらについて述べる。

(1) 継続的比較分析

複数のデータとデータの関係、データと概念の関係、概念と概念の関係などを比較し、類似しているのか、対極的なのかなどを検討していき、より入念な分析を行なうことである。この比較分析は、データ分析を通じて行われるので、「継続的比較分析」と呼ばれる。なお、これは前項のグラウンデッド・セオリーが備えるべき理論特性（表3-2）の第2項目と同じものである。

(2) 理論的サンプリング

サンプリングとは、標本を抽出することであるが、通常のアンケート調査で理想とされるのは母集団を想定し、その母集団から調査対象である標本をランダムに抜き出し、母集団の傾向を推測する「ランダム・サンプリング」である。一方、グラウンデッド・セオリー・アプローチでは、「理論的サンプリング」という手法を取る。これは、生成しつつある理論と収集中のデータ、あるいは今後収集する予定のデータを比較し、どの部分のデータが不足しているか検討し、次のデータ収集（標本抽出）を行うことである。

なお、通常のグラウンデッド・セオリー・アプローチでは、表3-4に掲げるように、場面あるいは人を単位に理論的サンプリングが行われる。表3-4であれば、ある場면을観察し、続いて対比的な場면을観察している。これに対し M-GTA では、ある程度の人数について集まった面接データ（ベースデータ）内で、まず理論的サンプリングを行いながら理論生成を行うのが基本である。例えば、5人分の面接データが集まったら、その集まったデータ内で理論的サンプリングを行う。そして必要に応じて（理論的サンプリングに基づき）追加データを収集し、さらに理論的サンプリングをデータ単位で行う（図3-3）。つまり、ある特定の調査対象者について分析し、それと対照的な調査対象者を探して分析する、というのではなく、データ収集及び分析を集中して行うのである。

(3) 理論的飽和化

「継続的比較分析」と理論的サンプリングを通じ、データ収集と理論生成を繰り返す。そうして生成されてきた理論により、研究対象とする現象を十分に説明できると判断されれば、データ収集と理論生成は終了する。これが「理論的サンプリング」である。なお、前節で示したように、理論的飽和化しているかどうかは、分析テーマの設定にも拠ってくる。

表3-4 通常の理論的サンプリングの例 (Glaser & Strauss, 1967)

さまざまな診療科を訪問する際のスケジュールは次のようにたてられた。まず最初に、わたしは患者側の死に関する意識が最小化されている部門を見てみたいと思った（そこで第1に未熟児科を見にいき、次に患者の昏睡状態が頻発する脳神経外科を見にいった）。その次には、病棟スタッフや、しばしば患者自身も大きな望みをもっているのに、死が急激に訪れてくる状況で死に向かう場合を見てみたいと思い、集中治療室の観察を行った。次に、患者は末期状態にあるとする予想がスタッフ側では大きいのに、患者側の予想ではそうであったりなかったりで、しかも死は緩慢な訪れ方をする傾向にある部門で観察を行いたいと考えた。そこで、わたしはガン治療部門を観察することにした。それから今度は、死が予期せず急激に訪れてくる場合の条件に着目したいと思ったので、救急医療部門を見学した。こうして、われわれは違ったタイプの部門の観察を行った。このように見てくると、われわれがさまざまなタイプの部門を見学する際のスケジュールを方向づけたのは、次の2つの枠組みであったことがわかる。ひとつは、ある一般的な概念図式である。この概念図式には死に関する意識とか予想のされ具合、そして死亡する速さ、こうしたことについての仮説が含まれていた。もうひとつは、展開途上にあつた概念構造で、これには最初の頃は想像だにできなかった事柄も含まれている。また時には、検討を要する項目とか、調査の初期の時点で見落としてきた項目について検討を加えるために、われわれは最初の2、3週間とか4週間の継続的な観察をした後も、すでに観察を終えた各部門に引き返すということもした。

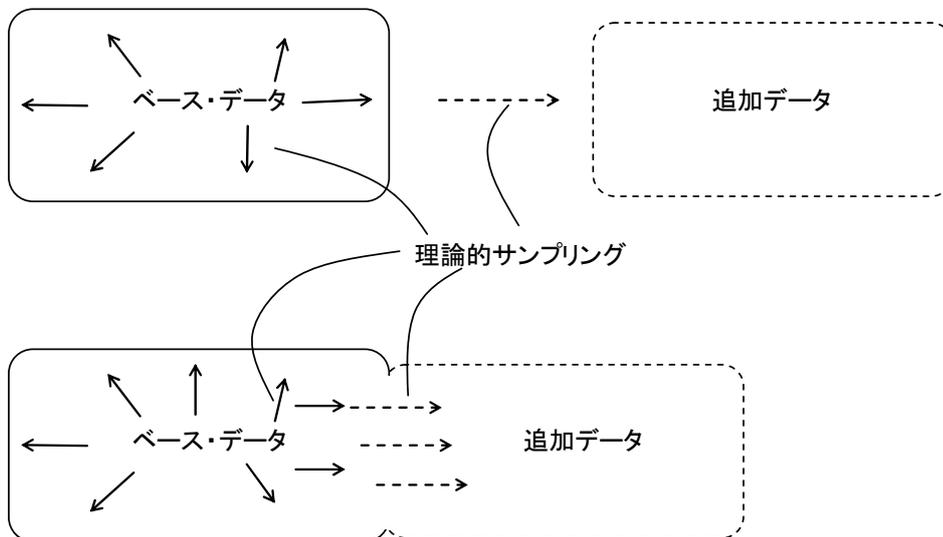


図3-3 M-GTAにおける理論的サンプリング (木下, 2003)

またさらに木下 (2003) は先述したとおり、グラウンデッド・セオリーであるために備えていなければならない5つの理論特性及びグラウンデッド・セオリーが指し示さなければならない内容の4特性について述べている (表3-2、表3-3)。

2 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの具体的手順

M-GTA の具体的な分析の手順について示す。この分析手順過程は、説明の便宜上 (1) 分析準備、(2) 概念生成、(3) 概念・カテゴリーの比較生成、と分けることとする。なお、本項目の内容は木下 (2003) に基づく。

(1) 分析準備

まず、研究テーマを設定する。これは本報告書でいえば「NS の形成過程」という大きなテーマ・研究の視点の枠組みである。つづいて、分析テーマと分析焦点者を設定する。分析テーマとは、研究テーマよりも細かなものであり、実際にデータと向かい合いながら設定するものである。本報告書でいえば、第 1 章第 2 節目的で示したにリサーチクエスション相当する。さらに、通常は研究上「分析対象者」と呼ばれる分析焦点者⁷⁾を設定する。続いて、面接調査などによりデータを収集していく。そして、収集されたデータと、事前に設定した分析テーマや分析焦点者が適合するのか、つまり (特に分析テーマの) 事前設定どおりデータを分析していけそうか確認する。ここでもし齟齬がある場合、分析テーマ等を実際のデータに適合するように調整する。

(2) 概念生成

続いて、いよいよデータ分析の実際の段階となる。なお、本項目の概念生成と次項目の概念・カテゴリーの比較生成は、同時並行的に行うものとされている。まず、分析テーマを意識しながら何度もデータを見直し、適宜データの中から「気になる部分」(単語であっても、1 行であっても、段落であっても、場合によってはページ単位であっても) をチェックする。続いて、研究者が注目したデータの塊を再度見て、このデータの塊が分析焦点者にとって何を意味するのかを考える。そして、その意味の解釈に基づき、概念名をつける。

これらの作業は、図 3-5 に示す分析ワークシートを用いて行う。すなわち、データの塊を抜き出し、ヴァリエーション欄に貼り付ける。続いてそれが何を意味するのかを検討し、定義欄に記入する。そして概念名を付けるという作業になる。

なお、ここでの注意点は、この作業は、データの内容をそのまま要約するというのではなく、あくまでも意味を解釈し、いくつかの具体例が説明できるような概念を作ることが目的であるということである。例えば、統合失調者自身の服薬管理について調査を行った佐川 (2001) は、面接調査において次のようなデータと出会った。「…『これはおかしい』ということで病院へ入って。で、こんなところに入ったらどうなんだろう、と思って。で、看護婦さんに頼んで『薬を飲みだしたら (症状が) 取れることもできるから』いうて薬書を書いたんですよ。『入院費を自分で支払うことができないから、早く退院させてくれ』って…。ここ (下線部) を佐川 (2001) は、例えば「服薬の確約による退院依頼」などの要

⁷⁾ 分析対象者ではなく、分析焦点者と呼ぶのは、特定の人間の視点からデータを解釈していく、すなわち「このデータはその人間にとって何か。その人間から見れば何を意味するのか」と問いながらデータを分析していくためである。

約的な解釈ではなく、「薬の効果について知識があり、服薬を条件に他者と取引をすること」と解釈し(定義づけし)、概念名を「服薬条件化行動」とした。この「服薬条件化行動」という概念であれば、退院を依頼するという行動の他に、服薬することを条件に他者と取引するような行動も含めて捉えることができるのである。このようにデータを要約的に解釈するのではなく、ある程度の幅の現象が説明できるような概念を作っていくことが重要である。

概念の定義ができたなら、概念の定義(概念の意味)と同様のことを表しているデータが他にないか探

概念名	
定義	
ヴァリエーション (具体例)	<ul style="list-style-type: none"> ・ _____ ・ _____ <p style="text-align: center;">(追加記入していく)</p>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> ・ _____

図3-5 分析ワークシートの構成(木下, 2003)

概念名	給水所としての養護教諭
定義	養護教諭と話をすることで、元気づけられたり気持ちが軽くなったりやる気が出たりすること。またそれが自分にとって良いことだと生徒が自覚すること
ヴァリエーション	<p>No.1「保健室に来る前まで、例えば自分の機嫌が悪かったとしても・・・C先生に自分の今のことを聞いてもらえれば気持ちが軽くなって、保健室に来てからは、気持ちのいい(笑) 次の授業を受けられるみたいだ。」 「自分がこうだったっていう事について『良かったじゃない』みたいに誉めてくれる時があれば、こう、じゃあ『今度はこうして頑張ってみな』みたいだ、こうアドバイスっていうか、そういうものもしてくれるから、これからの自分の為になるっていうか、そういうのがあるから。」 「・・・背中を押してくれるみたいだ(笑)。そういう、なんか。例えば何かがあって、そこに行くのが自分ひとりでは、出来なくても、C先生と喋ることによってそこに行けるみたいだ、のがあるから、こう、なにか、なんていうんですか、怖い先生とかに何か言わなきゃいけないときとかあるじゃないですか。俺、絶対に自分は怒られることなんだけど、なんていうんですか、言いづらいみたいなどきでも、C先生と喋って、それからほっとあえず、まあ先に、なんていうんですか、その事だけは伝えておこうみたいだ。やる気になるっていうんですかね。前向きな考えになれるっていうか、そういう風に、自分が考えられるようになるから。」 No.3「C先生の笑顔が(=来室目的)一番ですよ。・・・C先生の顔を見ると、こうあと何時間の学校生活をよし、頑張ろうっていう、はい。保健室の先生の力はすごいっすね(笑)・・・(=保健室に来ると)元気になる」 「・・・話しててこう、面白いから、プラスのことばっかだから。(プラスのこと?)んー、自分にとっていいことばっか、面白かったり、勉強になったりとか、そういうことばっかだから、笑顔が素敵だから、見てるとこっちまで元気になる(笑)」 No.6「(=C先生と話すことで)ストレス発散ができる。先生に話すときはたいい文句言うから、文句話をいうから、発散できる」 (他は省略)</p>
理論的メモ	生徒→ランナー、養護教諭→給水する人、水→生徒が元気になったり、気持ちが軽くなるような養護教諭の関わりとして概念名を生成。生徒が養護教諭との関わりによってリフレッシュできることを自覚している。つまり、頻回来室者がうまく保健室を活用している安定した時期。

図3-6 分析ワークシートの記入例(木下, 2003)

していく（データとデータの比較、データと概念の比較）。

また、分析ワークシートの理論的メモ欄は、生成した概念について気づいたこと、疑問点などを書き出していくためのスペースである。分析ワークシートの実例を図3-6に示す。

（3）概念・カテゴリーの比較生成

上記のように続け、概念生成を行っていく。概念生成をしていく中で、特に重要なのが、その概念と反対の例はないのか、データに戻って確認していくことである。例えば先述した佐川（2001）の例で言えば、服薬することを条件にしても他者と取引していない例はないのか、また服薬に関する他者との関わり方についてその他の行動はないのか、などをデータで確認するということである。もし、このような検討で反対の例や似ているが異なる例が多くあれば、それはそれで一つの概念として成立させる。このようにして、概念生成を続けていくのである（概念と概念の比較、概念とデータの比較）。

ある程度の概念が生成されてきたら（木下（2003）によればあくまで目安であるが10程度であるという）、概念間の関係が見えてくることがある。例えばある概念とある概念は対極的な関係であるとか、ある概念はある概念を包括する位置づけにあるのではないかなどである。これらの相互関係について図にするなどして検討していくとともに、その確認をデータに戻って行う。

また概念を包括するものは、カテゴリーと呼ばれる。概念間の比較をする中で、生成した概念の中により包括的な意味を持つものがあればそれがカテゴリーに「昇格」することもあれば、概念をまとめるカテゴリーがあるはずだと「予測」してカテゴリーを生成する場合もある。またカテゴリー同士を比較し、このようなカテゴリーもあるはずだとデータに戻り確認しカテゴリーを生成する場合もある。このようにしてカテゴリーや概念を生成していき、定義や概念名を調整する中で、理論を作っていく。

この理論は図の形でも表現できるとともに、文章の形でも表現できることが必要とされている。そのため、概念やカテゴリーを配した図を描き、説明しようとしている現象の全体像を示すとともに、概念・カテゴリー名及び少数のつなぎの言葉を用い、現象を表す意味の通る文章とすることができるかどうか確認することが望ましいとされる。

以上の流れは、図3-7に要約してある。研究者は、「生データ」から「概念生成」を行い、概念からこのような「生データ」もあるのではないかと、生データを見ていく（「生データ」「概念生成」間の双方向の矢印）。そのようにして「概念1」「概念2」・・・と概念生成をしていく。また、概念を生成していく中で概念間の関係を検討する。すると「概念3」は、「概念1」「概念2」を包括する「カテゴリー」であることに気づく。そのため、「概念3」は「カテゴリー1」に移動する。そして、「カテゴリー1」から「概念1」「概念2」以外に概念がないのかどうか、再度「生データ」を見ていく。また「カテゴリー1」と関連するカテゴリーはないのか（対極的であれ、異なった側面のカテゴリーであれ）見ていく。このように比較分析を継続することで、分析テーマであるプロセスが見えてくる、といった作業になる。

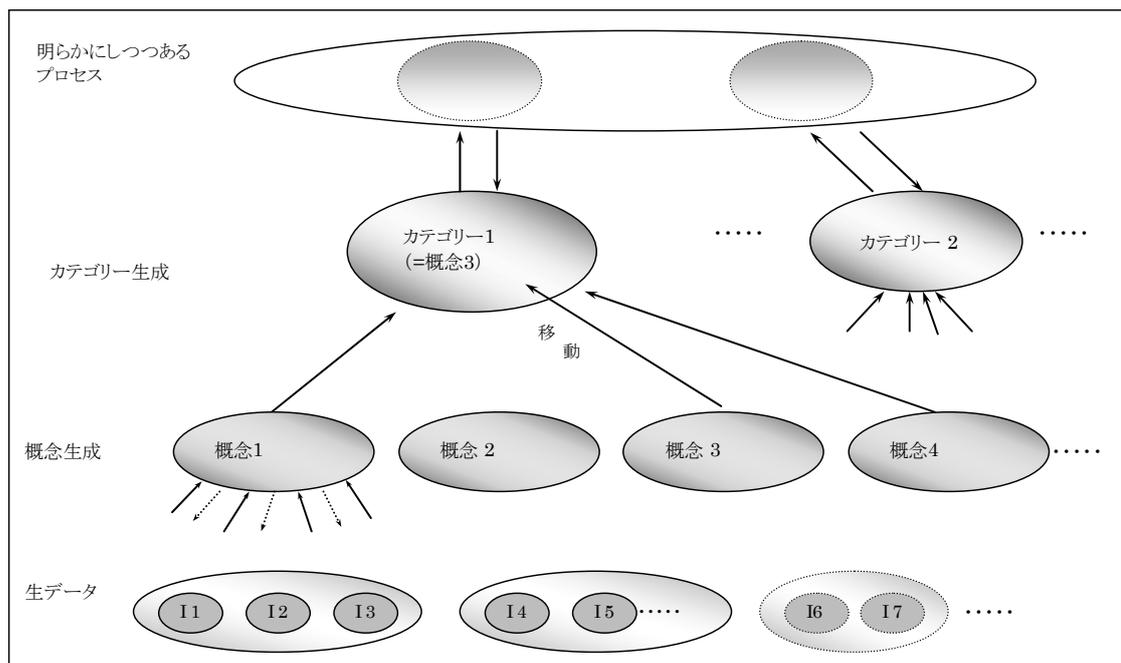


図 3-7 M-GTA の分析の流れ (木下, 2003)

3 その他

以上、M-GTA の特徴を前節で述べ、また分析手順について上述した。これらから見えてくる、M-GTA の最も基本的な特徴とは、「実在論」、すなわち主観によって左右されない「真実」が厳然と存在するはずなので、その真実を見つける、といった認識論に立つものではないということが言えよう。このことは、M-GTA は、「分析焦点者」の視点からデータを解釈することを試みようとしていること、また「研究する人間」の意識を重視していることから読み取ることのできることである。また、一方表 3-2、表 3-3 で掲げたとおり、実践での応用も重要な要素となっている。つまり M-GTA には、伝統的な「客観主義」、つまり客観的に測定できないものは取り扱わないようにするといった態度ではなく、特に実際の問題解決に有効な視点であれば客観性が保証されていなくても用いていく、といった「プラグマティズム」的視点を持っていることが分かる。

しかしながら、「客観主義」に立脚していないのであるから、全くデータを恣意的に扱ってもいいのか、つまり研究に都合のよいデータのみを抜き出し、都合のよい解釈をしてしまってもいいのか、ということにはならない。M-GTA ではその研究結果の質の確保のために、以下の要素が取り入れられている。

- 概念やカテゴリーの生成において、その概念やカテゴリーの意味する具体的データが複数のデータ源 (=複数の事例・インタビューイ) より見られたときに概念として成立させるようにする。
- その概念やカテゴリーの定義の意味するデータ内容の具体的形態が異なっていること (例えば「薬の効果について知識があり、服薬を条件に他者と取引をすること」という定義・意味から、服薬を条件に退院について交渉することや、服薬を条件に家を借りようとする、などの異なる行動形態や意志表現形態が含まれるように、概念・カテゴリーを生成させること。つまり、概念やカテゴ

リーがある一定の「説明力」を持てるようにすること。

- ・生成した概念やカテゴリーと対極的な例が存在しないか常にチェックしていく。

このように、M-GTA は恣意的な解釈に陥らないように工夫がなされており、分析作業を行う際にはこれらのことを実施する必要がある。

なお、これらの点は前項で挙げた質的研究法の「信頼性」「妥当性」を確保するための方策（32～33 ページ）と重なる点が多い。すなわち、複数のデータ源（＝複数の事例・インタビューイー）より見られたときに概念として成立させるということは「トライアングレーション」に該当するし、また概念やカテゴリーを定義するという作業が含まれているのは、「構成概念の明確化」に相当する。また、対極的な例がないかどうかのチェックというのは「反証事例の確認」と同様である。

一方、質的研究の「信頼性」「妥当性」を確保するための方策（32～33 ページ）には挙げられているものの、M-GTA であまり強調されていない項目は、複数の研究者によるチェックである。これは以下の理由によるものと考えられる。先述したように、M-GTA は必ずしも、主体を離れて客体が存在するという实在論の立場を必ずしも取るとは限らないことが考えられる。そもそも、複数の研究者によるチェックとは、どちらかと言えば实在論の立場から「信頼性」「妥当性」を高める手法であると考えられる。

「観察者間一致率の算出」など同様の手法が、实在論的認識を基にした実験研究などの量的研究で用いられるからである。ところが、M-GTA ではそのような实在論を必ずしも前提とはしないため、複数研究者によるチェックを重視していないことが考えられる。

また、実際の作業でも複数の研究者間での一致を常に求めていくことには相当の努力が必要なことが考えられる。M-GTA では比較分析を継続的に行なう必要があるが、これを複数の研究者間で行なうのは相当の努力が必要だということである。データ分析作業は、どのデータ部分に注目するのかに始まり、また生データの解釈（概念化）と、その概念定義を元にした生データの探索、また概念と概念の関係や、概念とカテゴリー間関係の分析、と行われていく。この作業の全ての段階を常に複数の研究者で行うのは、不可能とは言えないまでも、かなりの手間と時間が必要であろう。複数の研究者間のチェックが必須とされていない要因にこのようなことも考えられる。

最後に、インタビュー方法についても触れておきたい。質的研究法の入門書には、インタビュー時における留意点が触れられているものが多い。例えば、「仮説的質問」「あえて反対の立場の質問を入れる」「理想的な状態について聞く」「調査者の解釈について確認する」「探りを入れる」「インタビューガイドを用意すること」（Merriam, 1998）、「謙虚な姿勢」「本音を話してもらう」「自然な流れ」「具体的な話を聞く」「曲解しない」「聞きにくいときほどはっきりと聞く」「軌道修正する」（戈木, 2005）が挙げられている。一方、木下（2003）は「自分のペースで話してもらう」「相手が自分のペースで話せるよう質問する」「明らかにそれた話になったときは調整する」「時間は1時間から2時間程度」「インタビューガイドの使用」としており、Merriam（1998）や戈木（2005）ほど細かくインタビュー上の技法を挙げていない。これは、Merriam（1998）や戈木（2005）の指摘している留意点が当然の前提として捉えられていることが考えられる。

なお、さらに細かな項目を掲げてインタビューに臨むべきだという立場も考えられる。しかし、質的研究は基本的には「新たな領域もしくはあまり探索されていない現象」「複雑な社会的プロセス」を扱うことに力を発揮し (Hagner & Helm, 1994)、また M-GTA の目的は、そのような現象やプロセスについて「自分のペースで話してもら」「相手が自分のペースで話せるよう質問する」ことで得たデータに基づき、現象のプロセスに関する理論・枠組みを立ち上げていくことである。そのため、このような質的研究の特性や M-GTA の目的にあまりそぐわないことが考えられる。あまりに細かな項目を掲げてのインタビューは、語り手の話の流れをしばしば遮って質問することに繋がるとも考えられるからである。そのため、細かな項目を掲げて調査に臨むべきだという主張は、木下 (2003) を含め、質的研究法を選択する研究者の中では多数派の声ではないことが考えられる。

第3節 本研究の調査手順

本研究ではインタビューによりデータを収集し、M-GTAによりデータ分析を行なった。なお、以下の文中のデータ分析者とは本研究報告書の筆者（若林）を指す。

1 データ分析者及びデータ分析における留意点について

質的研究法は調査者自身の技量によりデータ分析等の質が左右される面があるので、ここで簡単にデータ分析者について紹介する。データ分析者は、本研究報告書の執筆時点で独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構に在籍する研究員である。データ分析者は、障害者職業カウンセラーの業務に10年間従事した後、研究員となっている。障害者職業カウンセラー時には、地域障害者職業センターにおけるジョブコーチ支援事業の担当カウンセラーを3年間担当し、ジョブコーチに対する指導・助言及び企業との調整を行っていた。その際、NS形成のための方策をジョブコーチと一緒に考えたり、企業側に対象者の雇用管理に対する依頼（NS形成に関する調整と言えよう）を行った事例を50件以上経験した。以上の経験は、以下に述べるデータ収集及びデータ分析に影響を与えていることが考えられる。この影響は2つの方向の影響が考えられる。すなわち支援担当者として経験を積んできたため、インタビューイによって語られる内容の情景が想像しやすいという良い影響と、逆に経験を積んでいることにより見慣れた・聞き慣れたことに対する感受性が薄れているという分析への悪影響である。そのため、特にこの悪影響が出ないようにしながら、分析作業を行うことを心がけた。

2 データ収集方法

(1) インタビューデータ提供者

本研究のデータ提供者（インタビューイ＝語り手）は、支援者（ジョブコーチ、障害者職業カウンセラーなどの就労支援機関に所属する就労支援専門家）及び支援先事業所の所属職員（障害者と一緒に働く一般従業員及び当該企業における障害者の受け入れの責任者である人事担当者）であった。これは、データ提供者の中で、インタビューの内容の中に登場する障害者の今までの細かな経緯について把握するためである。

(2) インタビュー実施場面

データ提供者にインタビューを行うために、データ提供者の所属する施設（職業リハビリテーションサービス機関及び企業）に訪問し、インタビューの内容の中に登場する障害者のいない、面接室や会議室などでインタビューは行われた。インタビュー実施時期は、平成18年11月～平成19年1月及び平成19年10月～12月であった。

(3) インタビューの進め方

先述した Merriam (1998)、戈木 (2005)、木下 (2003) が示した点に留意した上で、半構造化面接法で行なわれた。まず研究の目的(文書及び電話・メールにおいて前もって知らせたが、その際にはインタビュー内容についての項目も含めていた)について説明した。また、インタビューでは、ある特定の障害者の支援(受け入れ)事例について取り上げてもらい、その障害者や支援先事業所の職員について、今までデータ提供者はどのように関わってきたのか、現在どのように関わっているのか、今後どのように関わっていこうとしているのか、などについて質問し、データ提供者の体験や考えを得るようにした。データ提供者がデータ分析者にとって理解が困難である話題を話したときや、さらに詳細な情報が必要とデータ分析者が判断した際には、話題の流れを妨げないようにしつつ、適宜質問をさしはさんだ。なお、全てのデータ提供者は、先述したように前もって本研究及び訪問の目的が知らされていたため、前もってどの事例を語るのか選んでいた。この、ある特定事例を基にしたやり取りは、その特定事例にのみ固定させるものではなく、データ提供者がある事例を話している中で、「そういえば似たような事例でこんな状況もあった」といった他の関連した事例に関する話が始まった際には、それに合わせてインタビューを展開した。

インタビュー時間は1.5時間から3時間程度であった。インタビュー時間の長さは、語られる事例数及びデータ提供者の説明の程度により異なっていた。

なお、インタビューは結果的には、データ提供者とデータ分析者の一対一の形式ではなく、複数のデータ提供者がインタビュー場面に同席するグループ・インタビュー的な状況で行われた場合がほとんどであった。なお、このグループ・インタビューの状況では、常にインタビューへの出席者が変わらないのではなく、それぞれの日常業務の関係のため、インタビュー会場に出たり入ったりする場合もあった。

(4) インタビューデータの記録

インタビュー内容は、データ提供者に許可を得た上で、ICレコーダーに録音した。データ分析者はその後、録音された内容を文字に起こし、データ分析に臨んだ。

3 インタビューデータ分析方法

文字に起こされたインタビューデータは M-GTA の手法を用い分析した。その手順は以下のとおりである。

(1) 分析準備

まず、文字に起こされたインタビューを何度か通読した。その上で、分析テーマ(本研究では第1章第2節で示した3つのリサーチクエスチョンが該当する)と得られたデータが対応しそうか、すなわち分析テーマに関連した内容が豊富にデータに含まれているかどうかを確認した。

(2) 概念生成

データ分析者は、データを繰り返し通読しながら、分析テーマと照らし合わせて気になった部分にマーカーを引いていった。そして、そのマーカーの引かれた部分が、NS 形成過程という観点及びデータ提供者の視点から何を意味するものなのかを検討した。そして、その意味を解釈し、類似例がデータ内にあるかどうかを探した。もし類似例が見つければ、概念が一応成立したと見なした。また並行して対極例を探し、同様に複数の具体的例があれば、概念として成立させた。この一連の概念生成作業は分析ワークシートを用いて行った。図3-8は、本研究におけるデータ分析中に作成した分析ワークシートの例である。

概念名	解決困難な根本要因の把握
定義	支援を進めていくうちに、現在の困難な状況の背後にある根本的な要因があることを認識し、ジョブコーチ等が介入しても、なかなか状況を変えるのが困難であることを悟るようになること。
ヴァリエーション	<p>店舗では店長を中心に、概ね理解があるけども、結構本部が言うからなんか受け入れたみたいなどころがある場合がある。(Aセンターカウンセラー)*</p> <p>必ずしも僕はジョブコーチが入ることが、一番良い方法だとは限らないと思うんですよね。なんか違う方法もあるかもしれない。逆に言えば、カウンセラーさんが直接出向いて事業主と相談したり、あるいは、事業者向けに障害特性を理解を図るような勉強会をやったりとかの方が効果がある場合があると思います。(Cセンタージョブコーチ)</p> <p>そうですね、多分、会社方針で知らないうちにきてたということで、挨拶だけ、障害者雇いますよ。障害の障の字も知らないで、パートの人がね、なかなか受け入れろって受け入れられないと思いますよ。(E就労支援センター)</p> <p>一番最後に残っているのは、そこの女性の方との折り合いなんです。本当に修羅場として化してしまうようなときもあったりとか。(Cセンタージョブコーチ)</p> <p>ただ、何が許せないのか本当にわからないんですよね。職場に若い女性が入ってきて、どうもなんか悶々としたもんが、そういうところに根があるみたいで、こういう部分って言うのはどうしようもないところですね。(Cセンタージョブコーチ)</p> <p>あとは、これは今だから思うんですけど、だめならもうだめで、切ろうって思いが、あった気がします。(Dセンターカウンセラー)</p>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> ・*現場と本部の分断現象はよくあることだが、その現象自体ではなく、ここでの発言には、支援の困難さの象徴的な意味合いがあるのかもしれない。 ・どのようなプロセスで「これが根本要因だ」との認識が深まっていくのか？最初から根本要因を把握する事例はあるのか。→なし。色々支援をする中で、最後に硬い岩にぶつかる感じである。 ・どのような過程で認識が深まり、続いてどのような認識を持ち、どのようなアクションを取っていくのか。→次の段階を模索する？ ・困難な状況において、支援者が根本要因を思いつかない場合があるのか？(→なし)

図3-8 本研究での分析ワークシートの例

(3) 概念・カテゴリーの比較生成

概念生成が 10 個程度行われた時点で、それまで生成した概念がどのような関係にあるのかの検討を開始した。この検討には、エクセルを用いた。まず、シート上に概念名を記した文字フィールドを作成し、定義が近いと判断されたものについては近くに配置したり、ある概念から他の概念に移行する関係であったら矢印を、また概念間に相互の影響に及ぼしあっているという関係がある場合は相互に矢印を引いた。また、ある概念が他の概念を包括すると考えられた場合（すなわち、概念を含む「カテゴリー」であると判断された場合）は、前者のフィールドを拡大し、後者をその中に入れるようにした。これらの作業はいずれも、元のデータにおいてその関係がみられるかどうか確認しながら行った。

またカテゴリーを作る中で、そのカテゴリーに含まれる他の概念はないのか、また生成したカテゴリーと関連のあるカテゴリーはないのかを検討していった。このようにして分析を進め、まず得られたデータの示す内容（NS 形成過程）について十分説明できるような、説明図式を作るようにした。また説明図式が一応の形にまとまってきたら、概念名及びカテゴリー名のみでその説明図式の示す内容を表す文章の形にすることが可能かどうか検討した。もし、ここで図の上では形になっていたとしても、文章として表現するのに困難があると判断された場合は、分析が不十分であると捉え、さらに分析を進めた。

(4) その他

本研究では基本的にデータ分析者は筆者のみであった。これは前節で触れたように、M-GTA では研究者間の複数チェックが必ずしも必須とされていないことを考慮した上でのことである。ただし、研究結果については、インタビューイーに報告し、意見や感想を聞いた。

分析ワークシートとは別に、データ分析において気づいたことについては、日記形式の理論的メモノートを作成し記入していった。なお、以上の分析にあたっては、質的データ分析支援ソフトであるドイツ VERBI-Software 社製の「MAX-QDA2007」を活用した。

4 結果の記述方法について

分析し生成した概念については『 』で、概念を包括するサブカテゴリーについては< >で、また概念及びサブカテゴリーを包括するカテゴリーを【 】で表記した。